

氏名	原 美湖
ヨミガナ	ハラ ミコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第466号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 造形表現と思考－制作者のための現代美術をめぐる－考察－ 〈作品〉 Portrait in the Blue

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	小松 佳代子
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	本郷 寛
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	木津 文哉
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	大巻 伸嗣

（論文内容の要旨）

今日の美術表現では、現代美術と呼ばれる多様な表現がみられる。現代美術において多くの美術制作者たちは、彫刻や絵画といった形式に限らず、作品のコンセプトを主軸にもち、それをどのような手法で表わすかといったかたちで表現手法を思案してきた。コンセプトとは作品の概念であり、制作者の思考内容によるものである。つまり制作者が各々の思考内容を作品として表わすようになったことが今日の美術表現が多様化した要因の一つに挙げられるのである。

1960年代後半に現れたコンセプチュアル・アートでは特にコンセプトが作品の主軸となっていた。その一方で、80年代以降はコンセプチュアリズムを受け継ぎながらも造形作品をつくる制作者は少なくなく、筆者もその一人である。制作者が思考内容を表わしたいのであれば、言葉で表わす方が直接的であるように思われる。それにも拘らず造形作品をつくるのであるから、造形表現を通して思考内容を表わすことには制作者にとって何かしらの意義があると予想される。このような推測から、本論文はコンセプチュアル・アート以降、人の思考を伴う美術表現を現代美術と捉え、制作者の思考と創作行為との関係、およびその内実を明らかにすることを試みたものである。

第一章では、コンセプチュアル・アート以降から今日に至るまでの美術表現におけるコンセプトの位置づけを、欧米の現代美術史を参考に整理した。その上で80年代以降に活躍する彫刻家、レイチェル・ホワイトリード(Rachel Whiteread1963-)の作品に着目して論ずることで、80年代以降の造形表現は制作者の観念によるコンセプトがあって造形作品がつくられ、また造形作品をつくることでコンセプトに深みが増すといった造形作品とコンセプトとの相互関係があることを示した。

現代美術は鑑賞においても思考する媒体として捉えられる傾向にある。対話型鑑賞やアートプロジェクトでは、鑑賞者の思考能力、対話能力の向上とまちや社会の発展に資するものとして現代美術は期待されている。このように60年代後半以降の現代美術は、制作者、鑑賞者といった人の思考が中核をなす美術表現であることがわかる。しかしながら、人の思考を伴う美術表現としての現代美術の発展的可能性は鑑賞者の立場から語られることが多く、制作者が創作行為において思考することの意義を客観的に述べるものは少ない。

そこで第二章では筆者の制作過程記録の分析と、制作者の制作過程について研究している高木紀久子、岡田猛、横地佐和子の論文、画家である立場から絵画の創作行為について研究する小澤基弘の文献を参照することで、実際の制作過程における制作者の内的思考について論を進めた。制作前から展示までの間に、制作者は身の周りにある外的事物や作品の素材、展示場所など様々なく制作に関するものごとと関わりながら作品をつくる。この過程で制作者は、原初的思考、実験的思考、建設的思考、関係的思考といった様々な内

的思考を働かせている。制作者はコンセプトをこれから表わそうとする作品の軸および思考の軸として、コンセプトとく制作に関するものごとと照らし合わせながら作品を生成していく。

ではなぜ思考内容およびコンセプトを表す方法として造形作品をつくるのかということ、その解はく制作に関するものごとと関わりながら作品を生成しているところにある。く制作に関するものごとは、制作者にとってはすべて外的事物である。それらは制作者にとって視覚的に見る、または身体を通して触ることのできる対象であり、外的事物と関わるがゆえに制作者は身体的実感を伴いながら思考できるのである。このような制作過程のなかで制作者は自身の観念を見出し、観念からコンセプトを抽出し、コンセプトを作品のく素材一技法一かたちに置き換える。この過程で試行錯誤しながら多角的に作品とコンセプトとを深化・明確化し、最終的に作品として具現化するのである。すなわち思考しながら造形作品をつくることは、制作者の観念を試行錯誤の末に身体的実感を伴いながら具現化する行為なのである。

また観念は、制作者個人を介して見た周りの物事、言い換えるならば社会に対する一個人の考え方である。よって制作者自身の観念を具現化する制作過程とは、現代の社会に生きる自己の存在を、実感をもって確かめることのできる過程である。それは同時に、今ある社会のありさまを、制作者なりの実感をもって捉えることでもある。すなわち思考しながら行なう創作行為は、制作者にとって今を生きる自己と、今ある社会とを実感をもって捉える方法の一つなのである。そして完成作品と対峙したとき、制作者には作品を通して過去・現在・未来の自分自身の人となりを捉えるような思考がある。このことから造形表現における制作者の思考は、今を生きる自己の存在を確かめ、現在の社会のありさまを自分なりに捉えるような思考であることを明らかにした。

最後に第三章では、作品完成後に制作者が他者に向けて行なうプレゼンテーションをく再作品化の過程として捉え、ポートフォリオ、口頭による作品の言語化、そしてウェブサイトの内容と役割から実制作とは異なる制作者の思考について論じた。く再作品化は作品および活動を資料や言語として再構成する過程であり、そのなかでは制作者自身が現時点の制作者そのものを見つめ直す思考がある。教育分野におけるポートフォリオを参照すると、く再作品化は反省的・批判的思考を伴った上で制作者が正確な自己評価者となることを可能にし、他者との「外的な評価との緊張関係」のなかで自己評価能力が高められる可能性があることがわかる。また、く再作品化において制作者には他者に見せる・伝えるといった自己表示をする思考がある。それに対する他者からの共感と批判は、制作者の自己評価を何度も起こさせる起点となる。このように制作者と他者との相互関係においては、互いの自己評価・他者評価の思考の連鎖が生まれ、互いの思考が深められる可能性がある。もしこのような思考の連鎖があるとすれば、それが現代美術によって波及する人同士の思考の交流であると言えよう。

このように、本論文は現代美術のなかでも造形表現における制作者の思考を中心に論ずることで、制作者としての一人の人間が造形表現を通していかに生きるか、その内実の一端を示したものである。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、申請者自身の作品制作に基づき、現代美術における制作することと思考との関わりを明確にしようと試みた論述である。申請者は、現代美術と呼ばれる多様な表現では、その制作者の多くが作品のコンセプトを主軸として、それをどのような手法で表すかといったかたちで表現手法を思案してきたとしている。そして、コンセプトとは作品の概念であり、制作者の思考内容によるもの、つまり制作者が各々の思考内容を作品として表すようになったとしている。そのため、本論文では近代美術史におけるコンセプチュアル・アート以降の、人の思考を伴う美術表現を現代美術と捉え、制作者の思考と制作行為との関係、およびその内実を明らかにしようとした。

論文の構成は、まず第1章で、欧米の現代美術史を参考に現代美術におけるコンセプトの位置づけを整理し、造形作品とコンセプトとの相互関係を示した。また、現代美術は鑑賞においても思考する媒体として捉えられる傾向にあり、対話型鑑賞やアートプロジェクトでは、鑑賞者の思考能力、対話能力の向上とまちや社会の発展に資するものとして期待されていると述べている。

第2章では、先行研究を参照しつつ筆者の制作過程記録の分析を行い、実際の制作過程における制作者の

内的思考について論じた。思考しながら造形作品をつくることは、制作者の観念を身体的感覚を伴いながら具現化させる行為であり、作品はコンセプトと照らし合わせながら生成されていく。そして造形表現における制作者の思考は、今を生きる自己の存在を確かめ、現在の社会のありさまを自分なりに捉えるような思考であるとした。

第3章では、制作者が作品完成後に他者に向けて行うプレゼンテーションを再作品化の過程と捉え、ポートフォリオ、口述による作品の言語化、そしてウェブサイトの内容とその役割から実制作とは異なる制作者の思考について論じた。

本論文の成果として、幅広い展開を見せる現代美術について、申請者の制作者としての課題を一つの論考にまとめ上げたこと、そして自らの思考で制作を考えることの大切さを示し、こうした制作者の思考が繰り返されることで新たな表現への契機を作り出す可能性を示した点があげられる。

審査の過程では、申請者自身の課題に向かおうとする姿勢と、課程における理論研究の深まりが評価された。本論文が制作者の思考に集中して論じられていることは、それが現代美術に取り組む制作者としてのリアルな課題であり、制作者の技法・素材・表現研究として明快にする必要があったことである。各章の考察においても制作者としての率直な考察がなされ、本論文が制作者ならではの論考として成り立っていることは興味深い内容として評価できるとした。また、本論文の成果が課程修了制作の成果と密接に関係づけられていること、本研究が申請者の制作者としての展開を期待させるものであることも評価された。ただし、美術表現における制作や作品について理論的研究の必要性はあったとしても、美術表現そのものはその思考を超える視座を持つことが必要との指摘もあった。

審査結果として、現状のアートシーンの中で、現代美術における制作者として論述することの難しさを理解した上で、申請者自らの表現への強い思いと理論研究への意志の上に成り立つ、思考の繰り返しの中から抽出された論述は、課題を残すとしても、現代美術における思考の重要性を示し、また、これからの美術表現や美術教育の今日的課題を示した論文として評価し合格とした。

(作品審査結果の要旨)

提出作品 「Portrait in the Blue」は、1930×1940mmの亚克力板5枚を1セットとした平面作品である。

テーマとして、題名にあるように「ポートレート：肖像」をモチーフとし、技法的にはホットメルトグルー（エチレン酢酸ビニール系の接着剤）による画像の転写を施したドットを配置する、インスタレーションの形態をとっている。本来はガラス板を背景としてそこに溶け込ませるようにドットによる肖像をインスタレートする行為を試みているが、今回、展示場所の制約上から亚克力板によるインスタレーションとなった。

モチーフとして選んだモデル：人物は、それぞれ美術大学の学生である。そこには「美術大学」といういわば「閉じた」空間の中での存在である美大生が、それぞれ卒業・修了して社会に出ていった後に個々のアイデンティティを喪失していくかに見える変化を作品に内在させようとしている。

1984年生まれの申請者は、バブル崩壊後の失われた20年の中で育った世代であり、人としての存在の希薄さ・あやうさ、といった視点でメディアで語られることが、他の世代よりも多い世代である。自分の周囲にいる同級生たちがそれぞれ迎える「将来」に対する漠然とした不安、といったものも、作品制作の動機となっている。それらの、コンセプトそのものとしては申請者本人の口から声高に語られることはないが、本作品の成立を裏側から支える大きな要因である。

題名にある「～Blue」のblueは、インディビジュアルであり続けたい若者たちの多くが、就職用の証明写真により、均質化されてしまう、という観察に根付いたもので、その証明写真撮影の背景によく用いられる、ブルーのホリゾントの色に由来している。そうやって撮影された画像を出力し、そのイメージを熱したグルーにて写し取っていく。そしてドットに調製したのちにガラス板の上にインスタレートしていく、その行為の中で、ソフト（テーマやコンセプト）・ハード（ホットメルトグルーによるドット作成）両面で、すぐれた考察が認められ、それが評価され、審査全員一致で合格とした。

(総合審査結果の要旨)

原美湖は、本学修士課程に入学する以前から、一貫して作品コンセプト、素材の意味、展示空間などについて考察を深め、それを作品制作と理論研究の両面から追究してきた。作品制作では人の存在の痕跡を表現するために、解体される家の柱や壊れたアスファルトなどを型どりして別の素材へ置き換え、それをインスタレーション作品へと昇華させる作品を制作してきた。2年間のチェコへの留学も含めて博士課程においては、さらにコンセプトを深化させ、「人の存在の儚さと美しさ」を表現するため、透過性のある素材によって水滴のような形状の中にモチーフである人の像が浮かび上がる作品を制作した。そうした自らのコンセプトの生成過程について詳細に分析したのが提出論文である。現代美術は人の思考が伴う美術表現であると繰り返し言われるが、批評家や鑑賞者の視点から語られることが多い。そのような研究状況に対して、提出論文は、制作者の思考と美術表現との関係について論じることにオリジナリティが認められる。外的事物に触発されたコンセプトの生成過程、コンセプトと〈素材－技法－かたち〉との相互深化、作品展示の社会的意味、制作後に作成するポートフォリオなどの再作品化による自己評価といった、制作者の視点から美術制作過程を細かなフェーズに分節化して論じることで、現代美術が制作者の深い思考によって成立していることが説得的に論じられる。

そうした制作行為と論文執筆において、制作者の思考を伴う創作行為が「制作者にとって今を生きる自己と、今ある社会とを実感をもって捉える一つの方法」であるということによって、美術制作と人間形成とが重なり合う地点へと到達したことは、特に優れた点として評価できる。制作者としても研究者としても、今後美術教育に大きく貢献することが大いに期待できる修了作品・論文となっている。最終試験の結果も含めて、総合審査結果として課程博士学位に相応しい水準に達していることが認められ、審査員全員一致で合格と判定した。